夢 通信

平成27年 5月号
夢をつなぐ　心をつなぐ　世界をむすぶ
きぬがわ せいさ こうぎょう
衣川製鎖工業株式会社

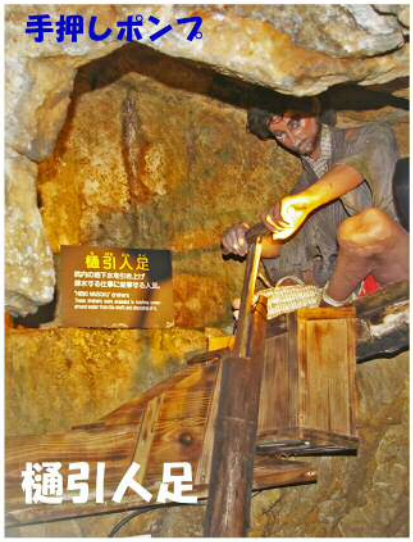
衣川宏介

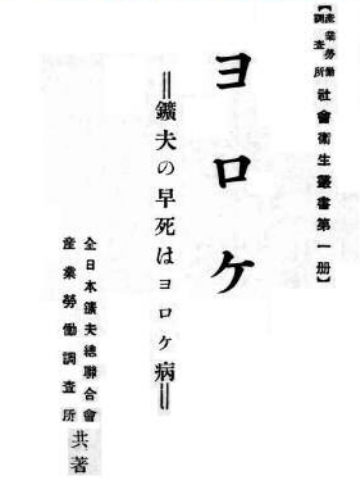
鉱山病 『ヨロケ』

お寺の多い旧生野町（現朝来市生野町）を案内して頂きながら疑問を感じました。寺町には異なった宗派の立派なお寺が８ケ寺、東から順に来迎寺（らいこうじ）・東西寺（とうざいじ）・西福寺（さいふくじ）・金藏寺（こんぞうじ）・教徳寺（きょうとくじ）・禅操寺（ぜんそうじ）・妙詮寺（みょうせんじ）・本行寺（ほんぎょうじ）とならんでいました。『生野銀山の里』のホームページには寺町の発生を以下のように解説していました。

①劣悪な作業現場で働いた坑内作業員の多くが短命であったこと。
②鉱山に全国各地から大勢の人が集まったため、いろいろな宗派が必要だったため。
③寺院にお手当米一年分、２～３石支給して僧院に安住感を与えたため、他の鉱山地帯の寺院が 移り住んだ。
④各代官が、おのおの帰依（きえ）崇拝する信仰を持っていたため。

鉱夫達は非常に短命だったのです。『三十になったら長寿の祝い』こんなことを佐渡金山の記事の中に見つけました。江戸時代以前から鉱夫の病気は『ヨロケ』と『けだえ』で、これは宿命と考えられていたようです。時代は大きく下って、大正14年に発行された鉱夫への啓蒙書『ヨロケ』のはしがきには、以下のように記されています。




【産業労働調査所社會衛生叢書第一册】
ヨロケ
＝鑛夫の早死はヨロケ病＝
全日本鑛夫總聯合會
産業勞働調査所 共著

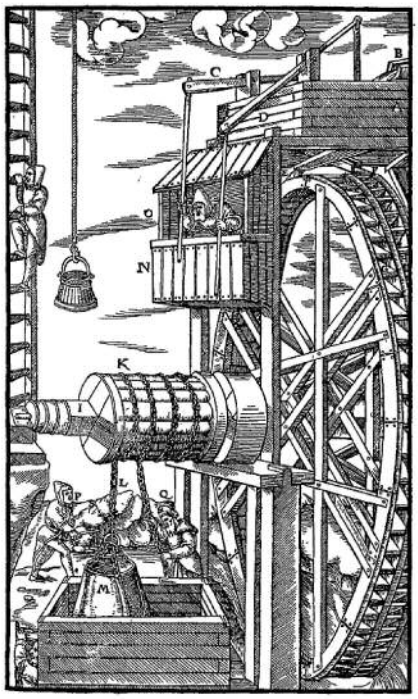
『ヨロケ』　＝　鉱夫の早死にはヨロケ病　＝

全国の鉱山労働者数は三十万人であるが、驚くなかれ、そのうち二十数万人の者が年々死傷している。つまり鉱夫三人居れば、その二人は必ず働くために死ぬるか、負傷するか、病気にかかるか、この運命から逃れることはできぬ。なんという怖ろしい運命だ。

けれども、ヨロケより怖ろしいものが世の中にあらうか。皮膚（からだ）の色は青黒く変わり、吐き出す痰は墨のように黒く。そして歩くたびに身体はヨロヨロと揺れ、そうして会社からも政府からも何の扶助（たすけ）もなく、結局のたれ死んでしまう。これがヨロケ病である。しかもそのヨロケには四五年以上坑内で働くものは、必ずかかるのである。

今日まで、この黒い死病のために仆（たお）れた者は幾十万人いたであろうか。けれどもこれが原因を知ることが出来なかった。鉱夫はただこれを不治の病として、あきらめるより外（ほか）はなかった。会社はこれに対して責任を持たず、従って予防策も講ぜず。政府はこれを職業病として保護する策もとらなかった。（以下略）

鉱山業が発達していたヨーロッパでは、すでに1500年代に、鉱山の科学的な研究が開始され、鉱内の排水や換気や労働の非衛生的な状態による災害や病気の生々しい記録が詳細に記されています。
（アグリコラの著書《デ・レ・メタリカ》1550年）



《デ・レ・メタリカ》1550年
坑内から水車を使って排水する様子。

『鉄のふしぎ博物館』
来て！見て！ふれて！　ふしぎ体感
鉄を見る目がかわりますよ。
ぜひお越しください。